


博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 柴田勝二 

学位申請者 金 京淑
論文名 太宰治における時代と文学の問題——中期を中心に

【審査の結果】

本論文は、従来太宰治の文学において比較的論じられることの少なかった中期の作品を焦点化して、そこに込められた表現の戦略を、作者の生きた時代社会との照応のなかに洗い出そうとした労作である。文学研究であると同時に歴史研究でもある二面性を備え、両者の交錯する地点に論を成り立たせようとする意欲的な着想によって貫かれている。審査委員会は、論文審査と最終試験（公開口述審査）の結果にもとづいて、委員全員の一致により、学位申請者に対して博士（学術）を授与するのが適当であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は、柴田勝二を主査として、学内の村尾誠一教授、野本京子教授、米谷匡史准教授、及び太宰治文学に詳しい早稲田大学名誉教授の東郷克美氏を迎えて構成された。

【論文の内容】

本論文は大きく第一部の「太宰治とその時代」と第二部の「時代を表象する中期の女性独白体作品」に分かれている。第一部は「作家以前の太宰治」と「戦時下の太宰治」の二つの章から成り、第二部は総論的な「『女性独白体』小説の創作へ」と『燈籠』論『皮膚と心』論『きりぎりす』論『十二月八日』論」という各作品論から成っている。戦前から戦時下に至る時代において、太宰が生きた時代社会の様相を精査しつつ、そこで生み出されていった作品群を論じるという眼目を実現するのに適切な構成となっているといえよう。

第一部第一章の「作家以前の太宰治」では、太宰の「弱者」意識が問題化され、青森有数の大地主の家に生まれながら、 Kommunismusへの関与とそこからの脱落によって、自尊心を強く毀損され、「弱者」としての自己認識を強く芽生えさせることになった経緯が押さえられている。これは太宰における「転向」であったが、中野重治などとは異なり太宰には投獄の経験もなく、いわば内的な推移として起こるべくして起こったものであるとされる。その点で太宰における転向の契機は曖昧なものであり、むしろそのた

めにコミュニズムから離脱した自己の内面を相対化する意識が作品に色濃く投影され、独特のイロニー的表現がちりばめられることになった。

第二章の「戦時下の太宰治」は本題である太宰の戦時下における意識と表現が総論的に扱われている。従来太宰の戦争に対する姿勢は、奥野健男の「否定を潜めた無視」という視点に代表されるような、傍観的ともいえる距離を置いた眼差しによって括られることが多かったが、金氏は太宰のなかには一貫して戦争に抵抗しようとする姿勢があり、ただそれを直接語ることのできない戦時下の体制のなかで、一見戦争やその主体としての日本を賛美するよう見えながら、イロニー的表現によってそれを巧みに相対化し、あるいは裏返す戦略が取られることになった。また何を語っているのか捉えがたい、意味をぼかした表現を取りながら、そこに反戦的ともいえる意識を込めた作品も見られる。たとえば昭和17年の『待つ』では、毎日駅に出かけては何ものかを「待つ」女性の姿が一人称によって語られるが、その「待つ」対象が明示されないにもかかわらず、彼女が待っているものが「平和」にほかならないことが読者に感得されるように書かれている。しかし「戦争の終結」や「平和」といった言葉を表に出さないことによって、検閲をくぐり抜けようとする戦略が取られているのである。あるいは『作家の手帖』では、「戦争の将来について楽観してゐる」と語りながら、その「楽観」の根拠である「奥さん」たちが歌うのどかな歌を「意味が無い」と断定することで、時局への批判をさりげなく織り交ぜたりするといった表現がおこなわれている。こうした反転しつつ重層する表現にこそ太宰的なイロニーの戦略があり、その基底にはしたたかな批判精神が息づいていることが強調されている。

第二部では太宰独特の「女性独白体」が焦点化され、そこに見て取られる表現の特性が論じられている。従来多くの作品に見られる太宰の女性一人称については、川端康成の「青春の虚構であり、女性への憧憬である」とする見解に始まり、「主従倒錯の契機と快感」（原子朗）、あるいは「受動的な自己表現」（東郷克美）といった捉え方がなされてきたが、金氏はあくまでも男性作家である太宰が、時代への批判精神を託すための装置としてこの文体を採用したという見方を打ち出している。すなわち家父長的な男性中心主義が支配的であった戦前、戦中時において、自己を女性に仮託し、女性の感性に同一化しようとすることによって、時代に対するプロテストをおこなおうとしたのだとされる。またその女性像も、当時称揚されていた「良妻賢母」型ではなく、私的な空想に耽るような女性を描くことによって、母性に収斂されがちであった当時の女性観を相対化する面が込められている。

全体の第四章から第七章にあたる第二部では、『燈籠』『皮膚と心』『きりぎりす』『十二月八日』という、戦時体制下に書かれた作品群に対して各論的な論評がなされている。『燈籠』では「まづしい下駄屋」の娘である語り手が、知り合った男のために海水着を盗もうとして捕らえられる。彼女を動かしている感情は男に対する庇護者的な感情である点で、「母性」と結びつけられる文脈があるものの、それはあくまでも私的、個人的

な次元でしか動いておらず、その点ではむしろ反時局的な性格をもつとされる。

第五章で論じられる『皮膚と心』では、早婚が勧められ、贅沢が戒められていた、戦時体制が進行していく昭和10年代半ばを舞台としながら、そこで国家の存亡とかかわりのない「皮膚」のあり方にこだわり、贅沢品にはほかならない化粧品の図案を書く男性を夫とする女性を主人公とすることで、反時局的な価値観が示唆されているとされる。また当時は文壇においては文学作品の「純粋性」や「素材性」をめぐる議論が繰り返られていたが、そうした文脈を考慮すれば、ここで語り手がこだわる「皮膚」とは文学の「芸術性」ないし「純粋性」のメタファーであるということもでき、そこに太宰の作家的な立場の表明が見られるという。

第六章で論じられる『きりぎりす』の語り手は、画家である夫に別れを告げようとする女性だが、その訣別は貧しいけれども純粋な芸術家であった夫が、著名になることで俗な人間になっていくことを嫌った結果であった。従来からこの作品はこうした語り手の姿勢に込められた作者の「反俗精神」に焦点化する形で論じられてきたが、金氏はむしろ戦時下の全体主義に呑み込まれまいとする作者の姿勢が託された作品として捉えている。すなわちここで重要なのは、「私」が自身の個人的な判断によって人生の選択をしてきたことであり、夫への別れもその一環をなすが、そうした個人性を打ち出すことが時流への抵抗としての意味をもつとされる。

終章の第七章では、太平洋戦争開戦を迎えた日の女性の感慨を語った『十二月八日』が論じられている。一見戦争に対する昂揚感が前景化され、戦争賛美とも思われるこの作品においても、「西太平洋」がどこを指すのか分からない夫を登場させるなどして盛り込まれる太宰独特のイロニーによって、反面では戦争が茶化されており、また「私」の敵愾心も「目色、毛色」が違っているから敵をぶん殴りたいなどという「滅茶苦茶」な論理によって語られ、かえって戦争の正当性が相対化されている。この作品でも時局を表面的に肯定しつつそれをイロニー的に反転させ、そこに批判や相対化を織り交ぜていく太宰独特の手法が現れているとされる。

【論文の特長と問題点】

金氏の論文は、これまで『斜陽』『人間失格』などの戦後の作品に比重がかけられがちになる陰で、本格的な論の対象となることの少なかった、戦前から戦中にかけての太宰の中期作品を焦点化し、その背後にある時代的な文脈との照応とズレのなかに太宰の作家的個性を見ていこうとする斬新なものであり、太宰文学への新しい視角を提示している。それとともに太宰が一人の日本人として生きた昭和10年代の社会的・思想的状況を浮かび上がらせる、歴史的な資料性も備えている。実験的な方法意識が目立つ初期作品と、終戦後の混乱期を背景として、無頼派作家としての名を高からしめた後期作品の間にあって、「明るい中期」などと簡単に括られがちであった時期の太宰の作品群に対する把握として、画期的な意味を有するといえよう。

金氏が取り上げた作品群で眼目とされているものが、太宰独特のイロニー的表現であり、初期作品には顕著なものとして問題化されることが多かったこの要素が、比較的平易な文体で書かれた中期の作品群にも通底する要素として論じられている。そのイロニーは、戦争に向かう状況を表向き肯定しながらそれを密かに揶揄し、批判する重層的な表現として現れることが多く、そこに戦時体制下で自己を表現者として生き延びさせようとする太宰の戦略があるとされる。とくに後半の論述で主題化されている、女性告白体の語りもこのイロニーと結びつく装置であり、感覚的主体としての女性に語りを担わせることで、当時の日本を覆いつつあった日本主義的なイデオロギーを、「皮膚」にこだわるような女性の感受性によって相対化する戦略が取られている。また太宰が描いた女性は、決して「銃後」を守ろうとするような女性ではなく、あくまでも個人としての意識と感覚に生きようとする人びとだが、そうした設定自体に、「母性」に収斂されがちであった女性に対する価値観を相対化する意味が込められているという。初期作品と比べると目立たない、手の込んだ形で作動している、こうした中期作品のイロニーの機構を洗い出す金氏の分析は見事であり、それがやはり太宰文学全体を貫く方法であることを明らかにしている。またこうした分析は、作品を丁寧に読み込み、膨大な先行研究を参照するとともに、当時の新聞、雑誌を渉猟することによって浮かび上がってくる思潮との共鳴のなかでなされており、きわめて説得力に富むといえる。

また金氏の論文はきわめて練達の日本語で書かれており、外国人の手によるものであることをほとんど意識させないばかりか、日本人の院生などでもなかなか書くことの難しい正確で論理的な日本語で太宰文学が精緻に論じられている。それだけでも驚嘆に値するものとして審査委員の高い評価を受けた。

こうした評価が与えることができる反面、いくつか物足りない点も見出された。最終試験の場で委員から出されたのは以下のような点である。

(1) 論の根幹をなす、イロニー的な相対化の戦略によって、時局の抑圧に対峙するという構図における、抑圧の根元に想定される国家権力は、実体的に捉えられたものというよりも、太宰の戦略から遡及的に導き出されたものであり、やや循環論法的な趣きを帯びている。太宰が抵抗しようとしたされる戦時下の検閲についても、近年の研究を反映させる余地があったといえよう。また太宰を特徴づけるとされるこうしたイロニー的な戦略は、太宰に限らず保田與重郎や谷崎潤一郎ら、同時代の多くの作家に認められるものでもあり、そうした文脈のなかから太宰的なイロニーを差別化する必要もあるだろう。

(2) 女性告白体の作品の語り手が、個人的な感覚にこだわる女性であり、その点で母性を押しつけられがちであった当時の女性に対する価値観を相対化しえたことが強調されているが、これらの作品の女性は世慣れない芸術家タイプの男性を庇護しようとすることが多く、その点では母性的とも家長的ともいえる性格をもっている。開戦の日に日本を守る決意を語る『十二月八日』の語り手の姿も、そのひとつの現れである。それ

が当時の価値観としてあった母性的なものどどのように違うのかが、明らかにされていない。

あるいはその女性による語りは、しばしばいわれるように、男性作家である太宰によって作られたものであり、そこには「男性的」な視点が込められているとも考えられるが、そうした「擬装」的な虚構性を、文体のメカニズムとしてもっと洗い出してもよかつたのではないか。

(3) 金氏が「中期作品」の特質として挙げる女性告白体の文体は、『斜陽』『ヴィヨンの妻』といった戦後作品にも見られ、むしろ一般的にはそれらによって太宰文学は代表されている。金氏が取り上げる作品群と、こうした戦後の作品の文体との間にどのような差があるのかは、提出論文だけでは明瞭ではなく、さらに追求する余地がある。また「中期作品」を対象として太宰論を構築することが眼目であるならば、女性告白体によらない『富嶽百景』『走れメロス』といった、広く知られた作品にも目を配る必要があり、それらが対象化されていないことはやや偏頗な印象を残してもいる。

(4) 太宰治の批判精神が向けられる先は、戦時下の状況というよりも、広く近代に向けられていた側面をもっている。それは夏目漱石が日露戦争後の状況を批判的に描きながら、同時に日本の近代そのものを相対化していたことと同様である。太宰があえて弱者的な人間を繰り返し描いたことも、近代批判としての意味をもつはずである。中期作品の時代性を重視するあまり、近代という時代に対峙した作家としての性格がやや閑却されているのではないか。

【総合的な評価】

上記のような物足りなさはあるとはいえ、戦争への傾斜を強める状況との交錯のなかで、独特のイロニー的表現を駆使しつつ自己を生き延びさせていった太宰治の表現者としてのあり方は十分に捉えられており、太宰文学の研究に大きな貢献をなしうる論文としての評価は明確である。委員から出された批判点も、論文の日本語の質の高さ、着眼点の良さと構成の堅実さ、先行研究への目配りの細やかさ、資料探索の貪欲さなどが称賛され上で、さらに論文の質を高めるならばという条件で出されたものが大半であり、それに対して金氏から今後の研究の課題とするという積極的な姿勢が示された。

公開審査会の後の協議によって、金氏の論文が博士論文としての水準に十分に達しており、博士(学術)の学位を授与するに値するものであるという方向で委員全員の意見が一致した。